

専徳寺報

第415号

平成27年1月9日発行
浄土真宗本願寺派
専徳寺

専徳寺納骨堂・永代供養墓受付中（パンフレットが本堂にあります）

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000

<http://sentokuji-iwakuni.net/>

専徳寺

検索

御正忌報恩講法要

御案内

ご開山・親鸞聖人のご遺徳を偲ぶ、一年最大の行事です。万障くりあわせてお聴聞くださいますようご案内申し上げます。

日時

1月22日(木)	昼1時半～3時半
23日(金)	昼1時半～3時半 夜7時半～9時半
24日(土)	昼1時半～3時半 ※朝座なし

講師

22日……… 住職・前任職
23日・24日… 本願寺派布教使・輔教
安方 哲爾師(大阪)

◆お斎料は500円、地区割りは

22日…灘 地区(11時半～13時)
23日…通津地区(11時半～13時)
※24日のお斎はありません。

◆園児参拝…22日朝

◆御伝鈔拝読…23日昼座と夜座

親鸞聖人のご生涯を曾孫の覚如上人が書きつづられた『御伝鈔』を拝読します。

夜座にて、新発意が初めて一段拝読いたします。



鐘楼屋根瓦修復

昨年の11月、無事に修復が終わりました。
ご協力ありがとうございました。



修復後



以前の状態



瓦修復作業中

◆大遠夜と万灯会 23日夜座
聖人のご臨終を偲ぶ厳粛な法座です。日中お仕事がある方もどうぞお参りください。

◆仏具回収…ご家庭でご不用となった仏具(お念珠、仏壇の荘嚴具等)を回収いたします。

●膝掛けをお持ちになると冷えなくて良いと思います。聖典、聴聞カードもお忘れ無く。

●法話中の帳場受付はお休みです。宜しくご協力下さい。

如来・人・言葉

100

昨年十一月十八日、大阪八尾の稲城選恵和上やお いなきせんえが往生されました。浄土三部經の研究、蓮如上人の教えを大切にされ、また西洋哲学にもつけた和上様でした。専徳寺にも昭和59年に一度ご来講を賜りました。厳しい言葉づかいの中にも温情あふれるご説法をされる方でした。種々ご教導賜りました。

今回はその和上の法話をご紹介します。



浄土真宗とは

稲城選恵

今日の私の問題

「あなたの家は何宗ですか」と人から尋ねられると、「ウチは門徒です」という。近畿地方では門徒と言っても通じるが、正しい名称は浄土真宗である。すると「浄土真宗とはどんな宗旨ですか」と聞かれる。「ウチの方は昔から『門徒もの知らず(※1)』といって、何もややこしいことはせんでもよい、気楽な宗教ですわ。たとえば浄土宗ではお盆になると、仏壇にいろいろのお供えをし、先祖まつりをするでしょう。ウチのほうは何もせんもいい。ほんとに結構ですわ」という。

また、誰か死ぬと早速「ウチは門徒だから門徒のお寺にお願いしなければならぬ」という。このような人は浄土真宗の門徒であつても

「名ばかりの門徒」である。

浄土真宗ということは何も知らなくてもよい」ということでもなければ、死んだらお願いするだけの関係のものでもない。この私を除いては関係のない教えである。

この私は今生きている。しかもこの私には世界中どこに行っても存在しない。そんな私というものに問いをもたないものは、せつかく地球上には存在しない貴重な宝を与えられていても通じないのである。

元来、仏教といえは、禅宗とか浄土宗とか真言宗とかを問わず、死んだ人には一切関係のない教えである。ところが現在では仏教とかお寺とか、あるいは仏壇、お経、お坊さんといえは、死人との関わりしか考えられない人が多いようである。実はまったく反対である。

逆に神さまは生きている人につながっているように思われている。結婚式を神式でする人は多いが、仏式で行う人は少ない。

ところがシメ縄をつけたたり、お払いをするのは、死魔しまが一月十五日まではこないようにという意味であるといわれる。また、葬式のとき塩を撒いたり、会葬者にきよめ塩をわたす風習が見られるが、これは死者を「けがれ」として敬遠する神道の考えからきているのである。

このように神道は直接「死者」に関わり、かつ「けがれ」として嫌うのであるが、仏教では死んだ人を「穢けがれ」と見る考えはない。穢れけがれというのは生きた人間の煩惱のことをいう。

ローソクの火

現在の日本人は仏教の受けとり方をまったく逆さまにしているのである。世界中の宗教の中

で、仏教だけは死んでから霊魂があるかどうかということをお問わない宗教である。何故なら答える必要がないからである。龍樹菩薩は「霊魂があるか」といった質問は、牛の角をしぼって乳が何リットル出たかと聞くようなものであると言われている。まったくトンチンカンの質問なのである。

仏教で問題としているのは、今ここに生きているこの私自身である。

この私の生きている事はあたかもロウソクの火の点ともっているごとくである。マッチでロウソクに火をつけたことはそのまま消えることである。火をつけたということはこの世界に生まれたことであり、消えることは死ぬことを意味する。この私が生きていることはそのまま死ぬという事なのである。

松尾芭蕉の俳句にあるように、まったく人間の生は「ちるさくら のこるさくらも ちるさくら」である。三月下旬から四月にかけて咲く桜も、五月にはその姿をすべて消してしまふ。花盛りの最中の桜でさえもきつい風にあうと一夜にして散り去ってしまう事もある。

ロウソクも扇風機のきつい風を受けるといつ消えるかわからない。それ故、ロウソクは最後まで点ともり続ける保証をもたない。老人の方が先に消え、若い者が後とは決まっていけない。三歳の幼児が八〇歳のおばあさんより早く死ぬという例はどこにでもあつた。

すべての生きものはこのような無常を場としているが、自ら消えること、死ぬことを知っている動物は人間しかない。それ故、人間だけが死をよけることを考える。このことが迷信や縁起かつぎとなるのである。しかし、いかに縁

起をかついでみても死ぬことからよけることは不可能である。もし迷信や縁起かつぎが確かなものであれば、多くの占い師は禍や不幸にあうはずがない。日本の国も戦争には負けない事になる。

ロウソクが点つていることはそのまま消える事であるのと同様、この私が生きていることはそのまま死ぬという事なのである。そしてこのことを知っているのが今生きている私である。

「あなたは悪性の癌です。あと二ヶ月しか生命は保証されない」と医師に宣告を受けたら、それが耳に入った瞬間から電気にかかったようにじつとしていられないであろう。「二ヶ月後であるから今は一つも関係ない……まだ二ヶ月もあるから今晚はゆつくり休ませてもらおう」と等とゆつりのある気持ちになれるであろうか。前途は全く暗黒のベールで閉ざされてしまう。隣に奥さんがいても、子供が三人揃っていても、両親が目の前にいても、何等の支えにもならない。ただこの私はただ一人この世に出て、一人この世から去っていくのである。いかに財産を多く持つている人でも、肩書きでいからしている人でも、ノーベル賞をもらった学者でも、大臣や知事の椅子にのぼった人でも、何らこの問題の支えとはならない。

死の壁を超える



このような問題を、今生きている私自体は持っているのである。この問題の前には人間の生きる答えはすべて消され、全く虚無の深淵のただ中に立たされてしまう。この問題を仏教では「後生の一大事」とか「生死の一大事」と言う。それ故、仏教とは今この私を問題にしているのである。

お釈迦さまも親鸞聖人も、どの高僧もこの問題が出発点である。この問題に対する正しい答えを明らかにしているのが仏教といわれる。それは死の壁を避けることでもなく、ごまかすことでもない。「生死出づべき道」といわれること、この壁を超えていく道を明らかにされたのである。この超えられた世界が涅槃ーさととりーといわれるのである。

涅槃の原語「ニルヴァーナ」は吹き消すという意味である。吹き消すのは自らの煩惱である。煩惱を吹き消すとさととりは開かれるのである。それ故、涅槃は滅度(生死を滅して彼岸に度る)とも漢訳されているのである。

仏教で「行」といえばこの煩惱をとる実践のことをいう。しかし煩惱は人生を自己中心の眼鏡をかけて見るところに生起するのである。この自己中心の眼鏡は簡単にとれるものではない。親鸞聖人はこの煩惱の海から一步もでることのできえない身であることを生涯悲しまれていく。そして、あたかも魚は決して水から出ることができないように、煩惱から生涯出ることのできない私たちの存在を「煩惱具足の凡夫」といわれている。

この「煩惱具足の凡夫」である私が、煩惱具足のまま、死の壁を超えていく答えが念仏である。それ故、念仏往生といわれる。往生とは浄土に直結しているのである。浄土はさとりの世界である。この念仏の法は、今、ここに、既に、この私の上に与えられている。

この私の手元に既に与えられていることをお姿で説明されているのが、皆さんの家の仏壇や、お寺のご本尊である。念仏の法はいつでもどこでも、この私の存在するところには常に先に来

てくださっている。それ故、この私には逃げ場所も隠れ場所もないことになる。

最高の宝

この「南無阿弥陀仏」の念仏の法を文字で説明しているのがお経であり、「正信偈」であり、法事の最後に拝読する『御文章』である。

『御文章』は「宝章」ともいわれる。この「宝」は地球の宝をすべて自分のものにしたよりもっと価値の高い宝である。というのは、地球上の宝がすべて自分のものになっても、癌の病気となり死刑の宣告をうけたら何の支えにもならない、しかし、この法の宝にあうと、今ここで死のうと生きようと用事のない世界が開かれるのである。島根の妙好人、浅原才市翁の「臨終も葬式も全く用事がない」といった境地が開かれるのである。

浄土真宗の家に生まれたということは、生まれながらにしてその宝がこの私に与えられているのである。だが、いかに宝が与えられていても、無関心なものには一生涯通じない。

この宝を曇鸞大師は「無上宝珠」、最高の宝といわれた。この宝が祖先のお蔭で今この私に伝えられているのである。それ故、仏壇は祖先を祀るためのものでなく、祖先からこの私にいただいた最高の宝を内容とするものなのである。お寺とは、今ここに後生の一大事を解決する答えが既に与えられている事を聞く場所である。すると、今ここで聞かせていただいた場所がそのままこの私のたすかる場所となる。それは死のうと生きようと用事のない答えを見出すことである。

『人生のともしび』より

※1 門徒もの知らず…正しくは「門徒物忌み知らず」。念仏者には死者の穢れという考え、更には迷信やまじない、祈祷と

寺内だより

み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

10月23日御往生

保津 赤崎 薫様 (87)

喪主 赤崎八重子様

10月24日御往生

由宇 泉 ハル子様 (84)

喪主 泉 久仁彦様

10月26日御往生

海土路 見常 芳助様 (95)

喪主 佐藤 幸子様

11月9日御往生

藤生 白木 武様 (88)

喪主 白木 厚栄様

11月11日御往生

保津 山下スマ子様 (99)

喪主 山下 誠一様

11月11日御往生

玖珂 広中 捷利様 (70)

喪主 広中 幹彦様

11月13日御往生

本呂尾 村重 キ子様 (99)

喪主 村重 正一様

11月17日御往生

山田 村岡 ミサ様 (94)

喪主 村岡 隆様

11月19日御往生

黒磯 左伊木辰枝様 (91)

喪主 左伊木満夫様

12月12日御往生

市内 上田キヨ子様 (97)

喪主 田原 信行様

12月15日御往生

南岩国 山尾 孝明様 (88)

喪主 山尾美津子様

12月15日御往生

青木 広田 尚敏様 (94)

喪主 広田 尚志様

12月16日御往生

青木 土井 和代様 (88)

喪主 土井 祥稔様

ご恩を偲びつつ

〔法事勤修〕(10月27日～12月31日)

〔通津〕松本文江33、木戸久夫3、三窪文子7、多山義人17、中崎哲夫3、重本忠17、谷川カツ子7、神田宏25、米本寿明1、兼中勲3、冲原健二3、村中慶吉3、村井哲也1、〔保津〕土井明子17、村中文明13、賀屋宏昌33、竹島進1、熊田征三7、赤崎ヨネ7、赤崎設3、〔青木〕品川淳三1・7、築岡正明17、〔黒磯〕岡林久美子7、藤木裕史3、季広禎真3、〔藤生〕村重恵美子7、高重文吉7、杉中慶一100、小笠原博3、白木規晴1、〔南岩国〕鍵本唱竟13・17、高山文子1、〔平田〕蔵田稔幸7、田巻源七1、〔大阪〕野原康子7、17、〔千葉〕山崎喜史7

おめでとついでございます

法物下付式(入仏式)

◆12月18日 御三尊

昭和田 東 正治様
お給仕の慶び一人に存じます。

ご報告いたします

法要余香(永代経法要) 11月13・14日

〔講師〕服部法樹師。〔参詣者〕13日…昼座104名、夜座31名、14日…昼座68名。〔お鉢米〕津村昌弘、吉柴伸一、半田正昭、岡迫博人。〔お供え〕河村アサ子、野原千鶴子。〔法要供養はがき〕69枚。法要総代様、仏婦理事様もありがとうございます。

山口別院報恩講 (11月26日)

〔参加者〕稲本順子、水上三千代

全国仏社福岡大会 (10月25日)

〔会場〕福岡国際会議場。〔講師〕佐々木高彰(熊本)、〔講題〕阿弥陀様の宗教、〔参加者〕白田憲光

山口門徒総代会結成40周年記念大会 (12月9日)

〔会場〕山口別院

〔講師〕宮崎哲弥(評論家)

〔講題〕なぜ「仏教」の時代なのか

〔記念法話〕谷川弘顕

「失われた自己を求めて―人間回復への道―」

〔参加者〕小方茂生、住職

専徳寺倶楽部冬の集い (12月20日)

午前中は雨でどうなるかと思いましたが、午後にはスッキリ晴れました。今年も多くの方がお集まりくださり、煤払や溝掃除、本堂の清掃等をしてくださいました。有り難うございました。

〔参加者〕岡崎福美、小方基史、賀屋国昭、吉柴伸一、坂井哲夫、白田憲光、高林宏明、多山博通、田中稔、半田正昭、藤重秀男、増本真一、宮本義明、村岡幹郎、村中紀一郎、森田幸一、(懇親会より) 松重吉英、吉柴奈保子、増本美佐江

ついたち礼拝「月のはじまりはお寺から」 2月1日(日)、3月1日(日) 午前9時より45分間